

ゾンビでもわかる心脳問題

1 心脳問題概説

1 _ 1 人の行動が含む謎

人の全ての行動には哲学的な謎が含まれている。

たとえば部屋にいて寒いと思ったなら電気ストーブのスイッチを入れる。ストーブは部屋を温めるが、やがて部屋が暑くなり過ぎたと感じたなら今度はストーブのスイッチを切る。このような経験は誰にでもあるだろうし、一般の人はそんな経験の過程に重大な謎が潜んでいるとは思わないだろう。

ところが哲学的に考えると、人が意志によって電気ストーブを操作する行為の全てを合理的に説明できず、或る種の超能力が作用している可能性さえ否定できない。

超能力と言っても様々だが、ここでは「心で物を動かす能力」と定義しておこう。するとストーブという物的なものを動かしたのは、寒いから部屋を温めようという心的なものだから超能力の可能性があるというわけである。

ここで少し教養のある人なら、ストーブを操作しようとする思いは脳の神経活動によって生じ、その神経活動が手の神経に指令を出してストーブを動かしたのだから超能力ではないと主張するかもしれない。

しかし脳の神経活動とは物理的な状態であって、感覚や思いや意志という心的なものではない。もし心的なものが脳の神経活動という物的なものに作用しているのなら、やはり超能力の可能性が否定できないわけである。

感覚や思いという心的なもの、手やストーブという物的なものは自然に関係し合っているように思える。このような素朴な世界観は「素朴な二元論」と言える。

物的なものと心的なものを分けるのにも素朴な理由がある。手は見えるが手の痛みは見えないからである。このような理由で太古から人は物と心を区別してきた。しかし物と心の関係を疑問に思うことはなかった。両者が関係し合っていることはあまりにも自明に思えるからだ。

しかし哲学的観点からその素朴な二元論を分析してみると、心と物が具体的にどの点でどのように繋がっているかわからないのである。科学的にわかっているのは、人が「寒い」や「痛い」という心的状態の報告をしたときに、その人の神経や脳がどのように活動しているかということ、即ち**神経相関**の問題だけである。つまり特定の心的状態には特定の物的状態が必ず伴っているという関係だけがわかっている。

肝心の問題、つまり心的なものが物的な脳にどう作用しているかということとはわからない。これは**心的因果**の問題と呼ばれる。心脳問題の核心的な問題である。

自然科学では、物的なものは物的なもののみを原因として動作するとみなされている。これは経験的にほぼ確実なものとされ、**物理領域の因果的閉包性**（または因果的閉鎖性）と呼ばれる。この理論を前提すると心的なものは物的なものに作用できない。たとえば人が暑いと思ってエアコンのリモコンを手にした場合は「暑い」と思ったのが原因ではなく、脳の神経細胞が手に指令を出したのが唯一の原因だということになり、世界に心的なものがなぜ存在するのかわからなくなる。したがって素朴な二元論は間違いであるという結論が不可避となる。

心脳問題を哲学的に論じた最初の人デカルトであった。デカルトは心的なものと物的なものはそれぞれ実体として存在し、双方は相互作用すると考えた。これは実体二元論と呼ばれるが、現代では物理領域の因果的閉包性がほぼ確実とされているため支持する論者は稀になっている。つまり大半の論者は心的な実体が物的な実体に作用するという超能力を認めたくないのである。

実体二元論が間違いならば、心と脳は認識的には異なっても、存在的には片方がもう片方に還元されるとみなす一元論が妥当だという結論に必然的に至ることになる。

一元論にもいくつか種類がある。最も単純明快な一元論は観念論（心的一元論）と唯物論（物的一元論）である。なお性質二元論（中立一元論）とは、心的なものと物的なものは一つの実体の二つの性質だとする理論である。これらは大分類であり、その下位には夥しい理論が提唱されている。

しかし心脳問題の諸説はどれも重大な困難を抱えており、心の哲学者ジョン・サールは「心の哲学の主要な理論は全部間違っている」と評している（MiND 心の哲学 p.16）。

唯物論は心的なものは存在論的に物的なものに還元できるという主張であるが、還元しなければならぬ心的なものがなぜ存在するのか説明していない。観念論は物的なものの実在を否定するので、たとえば富士山を見ていて目を閉じ、1秒後目を開けたら同じ富士山が見えるというような現象の規則性が説明できない。性質二元論は実体は一つとし、それには心的なものと物的なもの二つの性質があると考えられる理論であるが、因果的閉包性を認めるならば心的な性質は物的な性質に作用できないので、実体二元論と同じ困難を抱えることになる。

やはりサールの評価は正しいようだ。なぜ全ての理論が間違っているのだろうか？

1 __ 2 カテゴリー錯誤

現代の心脳問題はカテゴリー錯誤から出発しているのが錯誤の理由である。心的なものと物的なものを分けるのは確かに相応の理由がある。しかしその二種のは、実は同レベルのカテゴリーにあって決定的な相違がないかもしれないのである。

ここでカント哲学が想起されるべきである。

カントの形而上学においては**現象**と**物自体（実在）**という大分類がある。

現象とは意識への現れ、要するに意識内容全てのことである。その現象は物自体を正確に表していないとカントはみなす。たとえばリンゴを見る時、一般人はリン

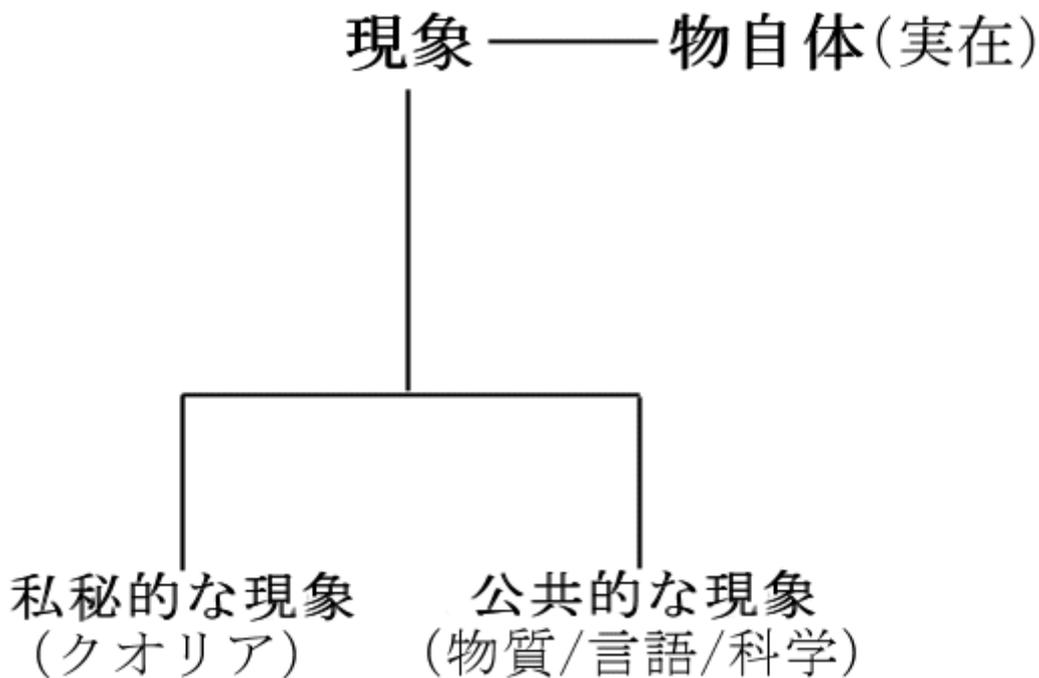
ゴの視覚像と同じものが意識外部に実在していると思うだろう。これは**素朴実在論**と呼ばれる。カントはその実在論を否定する。リンゴの視覚像の原因となったリンゴそのもの（物自体）は全く不可知だと考える。実在論を否定するので、カント哲学は観念論の一種であり、カントは自らの哲学を超越論的観念論と称している。

カントが観念論を主張したのはアンチノミーという合理的な根拠がある。ここでは詳説しないが、私はカントが自らの観念論の根拠としたアンチノミーの論証は成功していると考えます。即ち素朴実在論は間違っているのだ。

カント哲学の観点から素朴実在論と素朴な二元論を再考しよう。

かつての哲学者は自分が経験するものの内、感覚や思いなど他人から見えない私秘的なものを「心的なもの」とし、物質やその性質を記述する科学など他人と経験を共有できる公共的なものを「物的なもの」と分類してきた。しかしカントからするとそれらはいずれも現象という大分類の下位の小分類である

以下にその分類を図解しよう。



現象とは意識への現れ、要するに意識内容全てのことである。意識とは元より私秘的なものだから、心的なクオリアとは私秘的な現象の内、更なる私秘的なものとうことになる。

上の図で前述したカテゴリー錯誤の意味が理解できるはずである。心脳問題とは「心」と「物」という異なるカテゴリーにあるものたちの関係の問題だと考えるのは重大な錯誤である。「心」と「物」は「現象」という同一のカテゴリー内にあって恣意的に分けられているだけなのだ。

ジョン・サールが心の哲学の主要な理論は全部間違っていると評したほど、心脳問題の諸説には重大な欠陥があるが、それら欠陥はこのカテゴリー錯誤に起因している。

要するに心脳問題は、物的なものが意識外部に実在しているとみなす素朴実在論を暗に前提しているのだ。現代哲学では素粒子などマイクロな対象の実在性は論争になっても、マクロな対象の実在性は自明な前提にされている。

カント哲学を借りるまでもなく実在とは人間には不可知なものである。確かに素朴実在論を前提すれば人の経験の大半を説明できるので、物質は人に知覚されている通りに、意識外部に存在していると思いたくなる。しかし素朴実在論を安易に前提するのは哲学的態度として迂闊である。

カテゴリー錯誤と素朴実在論から出発したことによって、心脳問題は以下のような多くの問題が生じている。

2 クオリア

2__1 思考可能性論法

心脳問題に詳しくない人は、心脳問題ではクオリアを巡って唯物論者（物理主義者）と二元論者が戦っているというイメージを持っている場合がある。それは勘違いであり、現代の心の哲学者はほぼ全員が物理主義者である。確かに物理主義を批判している論者はいるが、彼らは現状の物理学ではクオリアを説明できないから、物理学の拡張が必要だと主張しているのである。したがって現代の二元論者たちは自らの理論に「自然主義的～」と冠している場合が多い。哲学的自然主義とは一般に、自然科学の知見に反することなく哲学を行おうという方法論である。論者によっては自然主義を物理主義と同一視する場合がある。要するに現代の二元論者は皆広い意味での物理主義者なのである。*

*現代では「唯物論」と「物理主義」は同じ意味であり、脈絡によって使い分けられているだけである。

逆に狭い意味での物理主義（以降「唯物論」と記す）の特徴は、心的なクオリアは存在論的に物的なものに還元できるという主張である。つまりクオリアは物的なものと認識のされ方は異なるが、存在としては同一であり、特定の心的な状態は必ず特定の脳の状態と同一であるとみなすもので、これは心脳同一説（トークン同一説）と呼ばれる。唯物論にも諸説あるが、この心脳同一説は唯物論の基礎的な前提となっている。

心脳同一説に対する批判としてクオリアの反転、コウモリのクオリア、マリーの部屋、中国語の部屋、そして哲学的ゾンビなどさまざまな思考実験が提唱されている。これら思考実験は、唯物論がクオリアについて何も説明していないことを指摘するものである。

確かに私が赤信号を見ているとき、同じ信号を見ている別の人には青信号に見えており、その人は赤信号という言葉は青い色の信号のことだと思っているという状態は思考可能である。このような論法を**思考可能性論法**と呼ぶ。

2__2 外在主義と内在主義

ところで上述のような思考可能性論法に対し、ウィトゲンシュタインの行動主義的な言語哲学の影響を受けた人たちから批判がある。後期ウィトゲンシュタインの言語哲学には言語ゲームという概念がある。彼においては語の意味とは用法である。彼を支持する論者たちは「赤」や「痛み」などの感覚を表す言葉は、実践的な使用の過程でのみその意味の適切さが評価されるとし、生活における実践的使用から離れて「青が赤に見えていれば」というような言葉は意味をなさないと主張する。

私の見解ではこのような批判は的外れである。前期ウィトゲンシュタインの著書『論理哲学論考』には言葉の対象について次の三つの分類がある。

- 1 : 語り得るもの
- 2 : 語り得ないもの
- 3 : 示し得るもの（連想させるもの）

この三分類は後期ウィトゲンシュタインにおいても放棄されたわけではない。

マリーの部屋や哲学的ゾンビの思考実験では、論者たちはクオリアについて「語り」合っているのではなく、「示し」合っているのだ。連想させ合っていると言っても良い。それを理解していないと思考実験の意義がわからない。

事実としてクオリア反転は示すことが可能である。ネド・ブロックが物理主義を批判するために考案した「逆転地球」の思考実験は、クオリアが言葉の機能と意味に論理的に付随しないことを論証している。

逆転地球とは、宇宙のどこかにある地球とそっくりな星である。逆転地球では、我々の住む地球と二つの点だけが違っている。一つは事物の色が逆転しており、澄んだ空や海の色が「赤」であり、血や消防車の色が「青」である。もう一つは逆転地球の人たちが使う言葉で、彼らは我々の「赤」を「青」と呼び、「青」を「赤」と呼ぶ。

この思考実験を拡張して考えてみよう。もし時空間の異常などで、逆転地球の人々と我々とが、電話など「音声のみ」で通信可能になったとしたらどうだろう。双方の地球の人々は同じ言語によって、双方の地球がそっくり同じ状態にあることを知るはずだ。澄んだ海の色を同じように「青い」と表現し、「赤」と呼ぶ色の信号で車を停める。そして戦争で赤い血が流れることに同じように胸を痛み、バカンスでは南洋の青い海を見たいと同じように思っていることを、互いに知り合う。

逆転地球の人々と我々とは、何の不自由も無く会話ができる。彼らの「赤」や「青」という言語は我々の言語と同じ「機能」と「意味」をもち、彼らは言語ゲー

ムに参加している。しかし、我々は彼らの色彩感覚が逆転しているのではないかと想像できるし、その想像は言語ゲーム内で容易に可能である。

後期ウィトゲンシュタイン支持者たちは、使用される語の機能と意味が同じである場合、クオリアの逆転など想像できないと言う。彼らの主張が間違っていることは、逆転地球の人々と我々が音声通信だけでなく、映像で通信できるようになった所を想像すれば明らかである。

なおこの私の主張にはクオリアとは「意味」ではないという前提がある。

認識論では知識の内主義と外在主義の論争がある。言葉の意味は意識内部にあるか、意識外部にあるかという論争でもある。ジョン・サールはどのような言葉にも特有の感覚が伴っているという理由で外在主義を批判するが、言葉の意味とは所詮他の語との関係で決まる機能的なものだから外在的なのだ（これはプログラミングを経験すればよくわかる）。

念のため第一章の図を再見して、「外在」といっても大分類である意識現象としての公共的な現象が言語であることを確認して欲しい。サールは全く間違っているわけでもなく、ただ素朴実在論を前提にしているだけなのだ。なお彼の「中国語の部屋」の思考実験は機能主義批判として有効だが、コンピューターは意味を理解できないわけではない。「クオリア」と「意味」を同一視すべきではない。

クオリアは意味に含まれず、示唆されるのみということが重要だ。

2__3 ゾンビ登場

世界の物理現象は全て科学的に説明可能であり、クオリアは物理的世界に作用することができないように思われる。したがって大半の心の哲学者は心的なものは物的なものに存在論的に還元できるという心脳同一説を前提しているのであった。

その心脳同一説を前提に「心とは機能である」と定義するのが機能主義である。

なお重要なことであるが、唯物論とは心的なものなど実在ではなく物的なものだけが実在だと主張しているのではない。心的なものは物的なものとは異なった認識のされ方をしているが、存在論的には同じものだと主張しているのである。この唯前提ならば物理領域の因果的閉包性の原理に反することなく心的因果を説明できる。心的なものは認識や説明のされ方が異なる（説明のギャップ）だけで実は物的なものであり、物的なものに作用することができるということだ。

要するに心の哲学における唯物論とは心を説明する理論でもあるのだ。

二元論（性質二元論を含む）では心的因果が説明できないから心は何のためにあるのかわからない。しかし唯物論では特定の心的状態は必ず特定の物理的状态と同一であり、両者は見え方が異なっているだけだと考えるから心的因果が説明できる。唯物論者は心の存在を否定するためではなく、心の存在理由を説明するために唯物論を主張しているのである。

以上の理由で現代では一番欠点が少ないと思われる唯物論が心脳問題において支配的な理論になっている。現代において唯物論が圧倒的に優勢なのは相応の理由があるわけである。

このような唯物論全盛の時代において、唯物論を根本から批判したのがデイヴィッド・チャーメーズである。チャーメーズはソール・クリプキが提起した「特定の脳状態に特定の意識状態が相関するのはアプリアな必然性がない」という主張を飛躍させ、どのような脳状態にも意識状態（クオリア）が相関していないゾンビのような存在が思考可能だと主張した。これがゾンビ論証である。

たとえばこの宇宙と異なる別の宇宙に私の複製人間がいて、私と複製人間は身体構造が物理的に同じで、脳の活動も同じ状態にあるとする。私は痛みを感じているのに複製人間は痛みを感じていないゾンビであることが思考可能だという主張である。

科学的に考えると物理状態が同一でありながら心的状態が異なる人間は思考できない。科学的証明とは法則性/再現性による証明なので、その科学的方法と科学的思考に慣れてしまった多くの学者にはチャーメーズのような発想ができないのである。しかし言われてみると哲学的ゾンビは思考可能であるよう思えてしまう。

唯物論とは、心的なものは物的なものと同存在論的に同一であることによって機能的役割を果たし、心的因果が説明できるという主張であった。つまり二元論では心的因果が説明できないが、唯物論では心的因果が説明できるので、現代では唯物論が優位なのであった。

哲学的ゾンビとは、ゾンビが思考可能であるゆえに心的なものがなぜ存在するかわからないとして、唯物論が存在論的還元によって説明に成功したはずの心的なものの特性を「再び」心脳問題の土俵に引き戻したものである。ゾンビ論証以前にはマリーの部屋やクオリアの反転などの思考実験があったが、それらはクオリアの機能までも否定するものではなかった。ゾンビ論証はクオリアが何の機能も果たしていない可能性を示唆することにより唯物論を根底から否定するもので、遥かに強力な思考実験なのである。この脈絡を知らないとゾンビ論証の意義がわからない。

ゾンビが思考可能であるならば、別の宇宙の私の複製人間はクオリアが欠如しているのに、私と同じ言動ができる可能性が否定できない。

唯物論は心的なものを物的なものに還元することで物的な一元論を徹底することに成功したかのように思えたのだが、実際は還元しなければならない心的なものが一体なぜ存在しているのか説明できていない。これがチャーメーズが提起した最も重要な問題である。

ゾンビ論証とは背理法である。物理主義と因果的閉包性が正しければクオリアが物理的世界に介入する余地がないので、何の機能も持てない。したがってゾンビが思考可能であり、物理主義はクオリアを説明できない、ということである。

ちなみに現代の表象理論のような複雑な唯物論はクオリアの存在理由を説明しようとしており、それがクオリアの存在理由を棚上げしていた古い唯物論と大きく異

なる。このような唯物論の進展は哲学的ゾンビの思考実験の影響を受けていると思われる。

ゾンビ論証が暴いたのは還元主義の不可能性である。第1章の図を見ればわかるように、還元主義とは或る現象を別の現象に還元しようとするものであり、同時に認識される異なる現象が同一であるという矛盾である。

還元主義は素朴实在論を前提にして、実在する物質に心的な現象が還元できると考えたことが根本的な間違い、要するにカテゴリー錯誤なのだ。これが心脳問題の主要な説が全部間違っている理由である。実際は物質もクオリアも現象という同じカテゴリーにあるのである。

正しいカテゴリー理解とは何だろう。それは第1章の図でわかるはずである。**現象と実在の関係こそが問題なのだ**。真の心脳問題は心と脳ではなく、心と実在の問題である。しかし科学的説明で世界の物事の大半が説明できるなら、人はどうしても素朴实在論に誘惑されるだろう。私も实在論を否定して観念論を主張するつもりはない。实在というものは、何らかの形態で存在すると考えるべきだろう。

以下では实在論を検証しつつ、私なりの心脳問題解消方法を紹介したい。

3 实在論

3_1 实在論論争

物質的対象は実在すると一般の人が素朴に思うのは相応の理由がある。視界に富士山があり、目を閉じると富士山は消える。しかし二秒後目を開けると再び富士山が現れる。意識外部に富士山が実在していなければその視覚現象の規則性が説明できないように思われるからだ。これが素朴实在論である。

しかし哲学的にその素朴实在論を擁護しようとする、思いのほか難しい。

物的なものと心的なものを異なる実体とみなしたのはデカルトであるが、ジョン・ロックはそれを物質の一次性質と二次性質として分類し直した。ロックは形や数や大きさといった物質自体に備わる性質を一次性質とし、物質が人の感覚器官に作用して生じる色や味や熱さという性質を二次性質（クオリア）として分類した。

ロックの分類は一次性質である物質が原因となって二次性質である知覚が生じるとする知覚因果という考え方を含意しており、人間の知覚は実在する物質を表象するものとみなすので表象主義と呼ばれる主張も含意しているのが重要である。知覚因果も表象主義も現代脳科学にまで継承されている考え方である。

なおロックの分類による一次性質が意識外部に実在していることは疑うことはできないとして、素朴实在論を哲学的に主張し直したのが形而上学的实在論や科学的实在論になる。

しかしロックの分類に対するジョージ・バークリーの批判は重要である。色や硬さといった二次性質を持たない一次性質というものはない。つまり意識外部にある一次性質とは意識から抽象して想定されたものである。このような理由でバーク

リーは一次性質も二次性質も全て意識内部のものとし、「存在するとは知覚されることである」という観念論を主張することになる。

しかし観念論では人の経験の規則性が説明し難いことは前述した通りである。物質的対象は何らかの形で実在していると考えざるを得ない。

3__2 メタレベルの形而上学

物質的対象が知覚されている通りに存在すると前提するならば、物理領域の因果的閉包性により、ロックの分類による一次性質のみの説明で人の行動と脳の状態が説明できてしまい、クオリアが世界になぜ存在するのかわからなくなる。

心脳問題を含む形而上学において重要なのは、形而上学問題はメタレベルの形而上学問題に従属させ、整合させなければならないということである。とりわけ時間と空間の問題は他の全ての哲学問題を決定的に変えてしまう可能性がある。ちなみに大森荘蔵はそれがわかっているから、時空という根本問題を棚上せず実直に考究し続けた。心脳問題は心と物（の実在）の因果関係を問うものであるから、当然メタレベルにある因果の形而上学に従属し、また因果はそのメタレベルにある時間の形而上学に従属する。すなわち、心脳問題は因果や時間の形而上学と整合させる形で理論を構築しなければならないということである。

不思議なことに、私の知る限りメタレベルの形而上学と整合させつつ心脳問題を論じたのは大森荘蔵ただ一人である。

少なくとも心脳問題と関わるメタレベルの形而上学には次のものがある。

M1 : 時間空間論（因果の問題はこれに従属する）

M2 : 実在論/非実在論

M3 : 独我論（独在論）

M1は形而上学の根本問題である。全ての存在や出来事は時間と空間内にあるので、時間空間論は全ての形而上学問題に影響を与える。

M2は既に概説した。物的な現象に対応する実在とは何かという問題が心脳問題と直結することは明らかである。これはM1の空間論と関係する問題である。デカルトは物質的対象を空間的な「延長」として、純粹に時間的な「精神」と区別した。仮に空間が実在しないとなると物質も実在しない可能性が生じる。

因果関係論はM1の時間論と主従関係にある。仮に世界における時間変化の実在を肯定する現在主義的な時間論が妥当だとするならば、因果とは時間の下位概念であるため、因果関係も実在する可能性が認められる。逆に時間変化の実在を否定する永久主義的な時間論が妥当だとするならば、因果関係は実在しないということになる。ただ永久主義的な立場でも物理法則の存在を否定するわけではないので、世界が「物理法則という形式」で存在していることは肯定することになる。すると物理学で描写される時間と因果も或る意味で存在することになる。

なお時間論は因果の問題だけでなくクオリアの構成原理、つまりクオリアがどのような原理で生成し、消滅するかという重大な問題に直結する。永久主義を前提にすれば（変化を否定するので）クオリアの構成原理という問題自体が消滅する。

心脳問題の所説は心的因果をいかに説明するかに苦闘している。世界において時間変化と因果が実在するか否かという問題は決定的に重要である。

なおM3は脳とクオリアの関係でなく、なぜ特定の脳が「私」のクオリアなのかという永井均によって提起された独在性の問題であるが、これは本論で扱い切れないので省略する。

3__3 カントの観念論と現代の実在論

時間変化と空間の実在性を否定する強力な論証がカントのアンチノミーである。

アンチノミーの論証を要約すると、時間変化と空間が実在するならば、時間と空間は無限の部分を持つことになる。無限の物事が実在するならば矛盾なので、時間変化と空間は実在（物自体）には属さないということである（無限とは可能的なものであるから、現実的無限は矛盾である）。

カントによれば時間と空間は感性の形式である（たとえば空間とは「長いという感じ」「広いという感じ」として意識内のみに属する）これがカントの超越論的観念論の基盤である。*

*これは私の解釈である。なおアンチノミーについて興味ある人は拙論「亀でも数学者でもわかる哲学の無限論」を参照されたい。

しかし時間変化と空間が実在しないならば、諸現象は対応する実在をもたないので、なぜ人が規則性のある現象を経験できるのかわからない。カントは現象の規則性の経験を、統覚と悟性のカテゴリーによって説明しようとした。

しかし統覚と悟性のカテゴリー言っても直観的に理解できる人はいないだろう。実はカントの『純粋理性批判』の驚異的な難解さは、人の経験世界が全て現象（観念）であると前提しながら、統覚と悟性によって規則的な現象が構成されるメカニズムを解説しようとしたものだからだ。世界が観念ならば、夢のように不規則な現象が生じてても不思議はないはずなのに、現実の現象には常に規則性がある。観念論を主張しながら実在論と同様に規則性の必然性を説明しようという困難な試みが、純粋理性批判を難解にしているのである。

ところでカントの観念論は現象と物自体を分けることから始まっている。たとえば私がテーブルを見るならば、その視覚現象に対応する「実在のテーブル」というものはない。テーブルという物の現象は、その物自体を表象するのではない。実在は不可知であると意味するのが物自体という概念である。

カント哲学は二元論である。現象が実在と対応していることを認めないので観念論ではあるが、ロックの表象主義とかけ離れているわけではないので、意識外部の実在を否定したバークリーと異なり或る種の実在論とみなすことができる。

なお実在論と言っても論者によって様々に定義されているが、実在論が実在論であるためのミニマルな要件は一般に次の二つである。

独立性テーゼ : 実在は人の認識に依存せず独立して存在する

真理対応テーゼ : 人の認識は実在と正確に対応している

独立性テーゼの方は説明の必要がないだろう。

真理対応テーゼを簡単に説明すると、人が長さ2メートルのテーブルを視覚像で認識する場合、意識外部にある実在とは視覚像と同じく長さ2メートルのテーブルであって、長さ10センチの携帯電話ではないということである。

現代における形而上学的実在論や科学的実在論をめぐる論争では、大半の論者は上述の二つのテーゼを実在論の要件としている。

ところが近年になって登場した科学的実在論の一種である構造実在論では、上述の真理対応テーゼを否定しており、独立性テーゼまでも否定する論者がいる。*

*ただし現代の実在論論争とは素粒子などマイクロな対象の実在性が論点であり、太陽やテーブルなどマクロな対象の実在性は懐疑の対象ではない。

構造実在論とは、科学で記述される世界の数学的構造こそが実在だという説である。科学の歴史では現象を説明するための仮説が後に廃棄されることがよくあり、これは悲観的帰納法と呼ばれる。構造実在論の提唱者は悲観的帰納法に対し科学的実在論を擁護するため、真理対応テーゼを否定して物理的对象の実在は不可知であるものの、現象間の関係の記述、つまり物理学で記述される世界の数学的構造のみは実在的なものとして認識できると主張する。

なお真理対応テーゼだけでなく独立性テーゼまでも否定する構造実在論者もいる。彼らは悲観的帰納法に加え、量子的対象の決定不全性問題を挙げる。たとえば電子は個体として扱われることもあるが、量子場理論において「場」という非個体として扱われることもある。このような決定不全性問題から彼らは量子的対象の非実在を主張し、量子的対象を数学的に記述した構造のみが実在であると考えた。

構造実在論の原型は20世紀初頭のアンリ・ポアンカレにまで遡る。ポアンカレは科学者であるが、カント哲学の影響を受けた科学哲学者でもある。彼の哲学は実在は不可知とするカントの形而上学を継承している。そしてポアンカレ哲学を原型とする現代の構造実在論は、それまでの科学的実在論の潮流に逆行してカント哲学へ再帰していると解釈することができる。ロックの言う一次性質も意識外部に実在しない可能性があるという主張だからである。

ここで重要なのは、ミニマルな実在論の要件である独立性テーゼと真理対応テーゼを否定しても、必ずしもバークリー的な観念論にはならず、依然として自然科学と親和的な実在論であることができるということである。

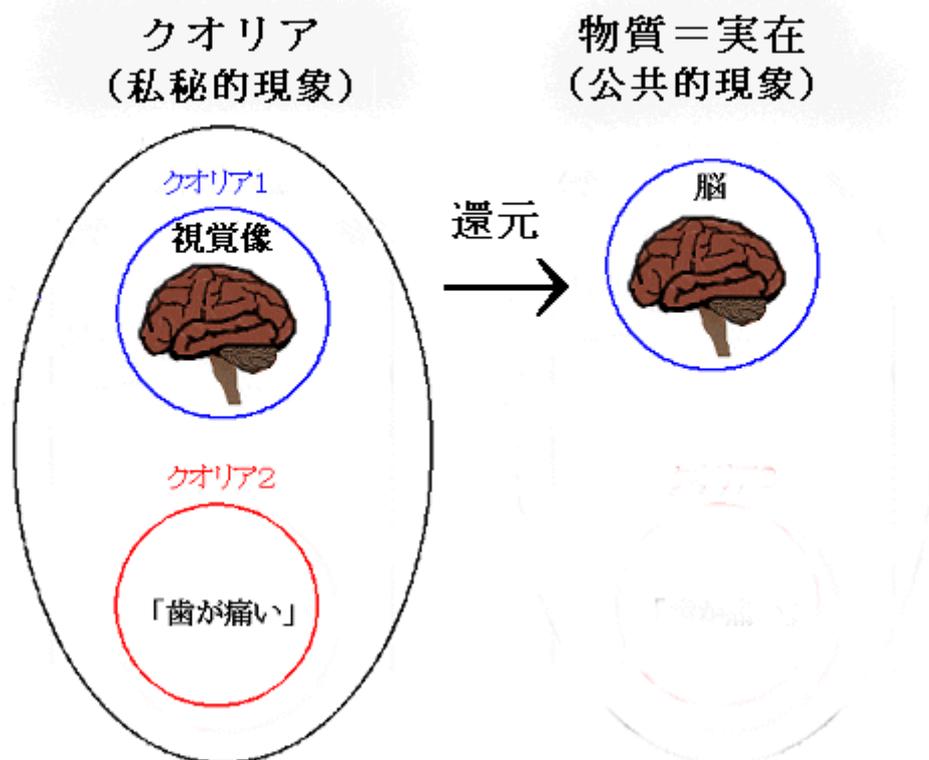
構造実在論の主張はあくまで素粒子などマイクロな対象に留まっているが、それを太陽のようなマクロな対象まで拡大しても存在論的には何も変わらない。

実在論は大きく変貌しつつある。構造実在論を前提すれば心脳問題が解消する可能性があるはずだ。

第1章の図を想起されたい。存在は現象と実在という大分類が可能で、その現象には私秘的な現象と公共的な現象があるのだった。公共的な現象を意識外部の実在と勘違いするのが素朴実在論である。現代の心脳問題は唯物論が圧倒的に優勢で、素朴実在論を前提して公共的な現象に私秘的な現象を存在論的に還元しようとしている。しかしそれは或る現象を別の現象に還元しようとするカテゴリー錯誤である。

以下の図では歯痛を感じている時に、自分の頭部を開頭して鏡で脳を見ることを想定した場合の、唯物論的な還元主義による見方を表している。

還元主義(唯物論)



上の図で「存在論的還元」のカテゴリー錯誤がよくわかるだろう。

存在論的還元とは、二つの私秘的な現象と一つの公共的な現象が同一のものだという主張である。公共的な現象を実在と同一視するのは錯誤であり、実質的には異なる現象が同一であると言う矛盾である。

本論冒頭でサールが「心の哲学の主要な説は全部間違っている」と述べたことを紹介したが、その間違いの原因がこのカテゴリー錯誤にある。或る現象を同じカテゴリーにある別の現象に還元することはできない。科学的記述だけで説明が尽きる

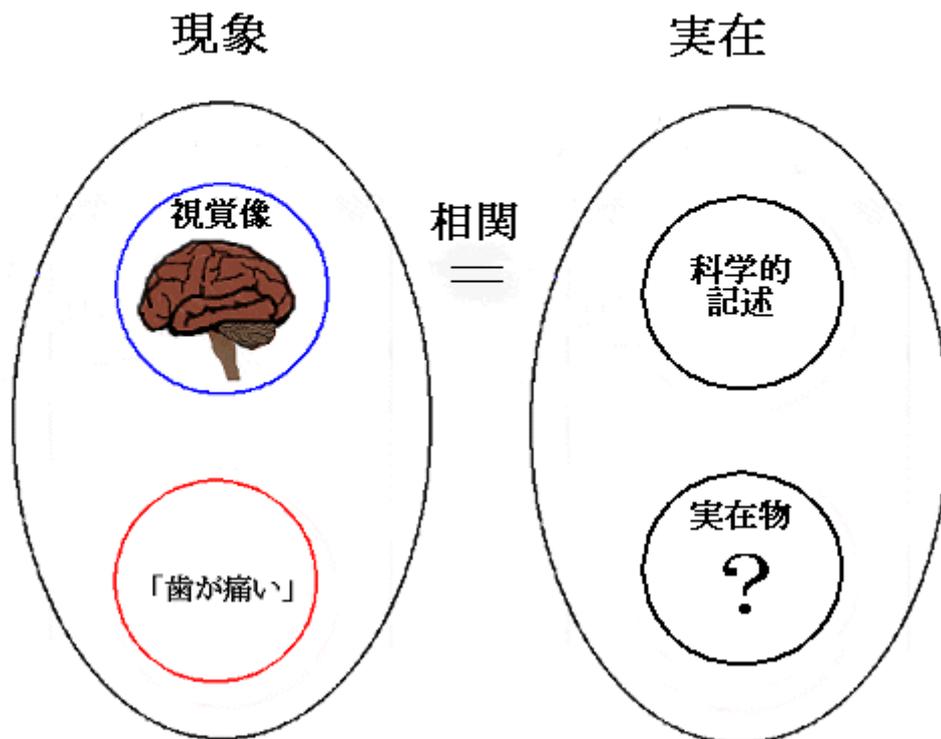
ならクオリアを欠いたゾンビが思考可能になるからだ。還元主義の最大の間違ひは公共的現象である物質を実在と同一視することだ。

なお性質二元論者も素朴実在論を前提しているため唯物論と同じ困難を抱えている。

そもそも問題の根本は現象と現象の関係ではないのだ。現象と実在の関係こそ探求されなければならない。素朴実在論は単純に間違っていることは前述した。しかし現象の規則性の理由となる物質的現象に対応する何らかの実在はあるべきだ。それはカント哲学に源流を持ち、ポアンカレを經由して現代に登場した構造実在論の主張する「実在」であると私は考える。

構造実在論を前提するならば還元主義を否定して、現象と実在の関係を次のように図解できる。

非還元主義



上図も歯痛がある時に自分の脳を見た場合を表している。非還元主義は現象と実在の二元論であり、現象を実在に還元することを拒否する。物質的な脳と対応する現象外部の実在物は全くの不可知とみなし、科学的記述だけは実在的なものと認識できると考える。なお「相関」という記述は「神経相関」の概念に対応する。

この非還元主義のエッセンスは、**実在とは現象の科学的構造とみなすことである。**どのようなクオリアにも科学的な構造があると前提すれば、クオリアと実在の関係が無理なく説明できるのだ。これは性質二元論と一種と言えるだろう。

この非還元主義なら還元主義にあった困難を排除できる。

自分の脳を鏡で見て脳の視覚像（クオリア）があれば、そのクオリアは実在の脳と同一なのではない。実在は脳を記述した科学的構造だということである。

ただし以上の理論はクオリアと実在の関係を無理なく説明できるとしても、心的因果の問題を解消することは出来ないかもしれない。つまりクオリアには構造実在論が言う意味での科学的構造があるわけだが、その科学的構造はクオリアが生じた原因と思われる物的世界の科学的構造と繋がっている。たとえば交差点で赤信号を見る時、物理的な信号は特定の周波数の光を発して、人の網膜がそれを受け取り、神経伝達物質を通じて脳に信号が送られ、脳の神経細胞たちが複雑な発火パターンを形成する。そして発火パターンを原因として人の四肢が動作する。

つまり人が赤信号のクオリアを経験したから交差点で停止したようでも、科学的説明だけでその行動の説明が尽きるのなら、依然としてゾンビの思考可能性を排除できない。つまり世界になぜクオリアが存在するのかという問題は解消されないということである。

これは心的因果の問題である。

心的因果の問題は即ち因果関係の問題である。前述したが因果とは時間変化の下位概念であるため、心的因果の問題を考えるためには時間と因果の問題を究明しなければならない。

4 心脳問題と時間論

4 __ 1 永久主義と因果関係

因果関係の実在性がヒュームによって懐疑されたことは周知であるが、現代の時間の哲学は変化の実在性を否定することで因果の実在性も否定していると解釈できる。因果とは時間変化の下位概念である。「何かを原因として次に何かが生じる」と言う言葉には既に変化の概念が含まれている。

一般の人は変化が実在しないという主張など奇妙奇天烈としか思わないだろうが、哲学において変化の実在を否定する理論は永久主義、または静的宇宙論と呼ばれ、時間の哲学においては支配的な理論である。

この永久主義では相対性理論が記述する「時間」の実在は認めるが「変化」の実在は認めない。一般に時間と変化は不可分だと思われているが、それを分けるのが永久主義である。

相対性理論の記述方法にミンコフスキー空間がある。特殊相対性理論には同時性の相対性という原理があり、絶対的な現在が否定され、現在も過去も未来もミンコフスキー空間内に対等に記述される。その静的なミンコフスキー空間を実在的なものとみなすのが永久主義である。

ところで変化が実在しないという理論は哲学者が相対性理論を勝手に解釈したものではない。最初に解釈したのは物理学者である。アインシュタイン自身も時間について静的宇宙論を示唆する発言をしてるが、私の知る限り物理学者で変化の実在を明確に否定した最初の人アインシュタインの協力者だったヘルマン・ワイルである。ミンコフスキーは時間と空間が統合された四次元時空こそが実在だと主張したが、ワイルは1927年の著作で、ミンコフスキーに倣って四次元時空は実在だと論じ、「客観的な世界はただ存在するだけで、何も生起しない」と明言している。その後多くの有名物理学者が変化の実在を否定する発言をしている。

時間と空間が融合した四次元時空では、空間が消えないように時間も消えない。だから変化や時間の流れは存在しない。四次元時空を塊のような図で説明するのでその実体はブロック宇宙とも呼ばれる。永久主義ではそのブロック宇宙の内部に太古の恐竜も、西暦2022年現在の出来事も、3000年後の未来の出来事も、全て永久的に存在していると考えられる。これが永久主義である。

対する現在主義（動的宇宙論）では現在だけが実在し、過去はかつて実在したが今は無く、未来はやがて実在するだろうが今は無いと考える。これは変化の実在を認める時間論である。

現代の時間の哲学では相対性理論とマクタガートの時間論との親和性から永久主義を支持する論者が圧倒的に優勢である。なお永久主義は変化を否定するのでカントのアンチノミー（時間の無限大）を回避できるという利点もある。

永久主義では変化を否定するため生成と消滅の概念を含む因果関係の実在を否定することになる。しかし物理法則で形成された四次元時空の実在は認めているのだから、時空内の各出来事は物理法則により必然的に存在しており、人の視点からは因果関係が存在しているように見える。つまり秒速50メートルで走り続けている電車が2秒後に700メートル先の空間にあることはないということである。

因果関係は実在しないが、人の観点では因果関係は実在するのと変わりが無い。因果とは意識内在的な概念である。

では、この因果関係論と前述の永久主義を組み合わせると心脳問題を再考しよう。

4 __ 2 逆向き因果

心脳問題の最大の課題は心的因果の問題だった。

構造実在論を援用すれば唯物論的な還元主義と異なり、クオリアと実在との関係が無理なく説明できる。しかしそれだけではゾンビの思考可能性が完全に排除できない。心的因果を説明できないからだ。

しかし因果関係というものを、実在に属さない意識内在的なものとみなせば解消できる可能性がある。

私は因果そのものを逆向きに見ることで心的因果の問題を解消出来ると思う。これは大森荘蔵による「透視因果」という思考法を基にしている。

大森は心的一元論者であり、実在論を拒否していた。透視因果とは実在論的な表象主義＝知覚因果とは正反対のものである。一般の知覚因果説ではリンゴなど物的

対象を見る場合、リンゴに太陽や照明の光が反射し、その光が人の網膜に入り、神経を伝播して脳細胞に複雑な発火パターンが形成され、リンゴの映像という視覚像が生じると考える。

逆に大森の透視因果説では、まずリンゴの視覚像があり、その原因として脳の状態が求められ、その原因として神経の伝播が求められ、その原因として光が眼に入るということが求められ、その原因としてリンゴに光が反射するということが求められる。

大森は人の視覚風景の構造を次のような「見透し」構造とみなした（『新視覚新論』134頁）。

…脳→視神経→網膜→眼球→近景→中景→遠景→…

「→」は因果の順序を示している。脳や視神経を視覚に含めるのに疑問を感じる人もいるだろうが、大森によれば脳や視神経は「透明に見透かされている」のである。それゆえ脳に異常が生じれば視覚風景も変化する。

脳は透明に見透かされているという大森の発想を、私は構造实在論を援用し、实在の脳はクオリアの科学的構造であると考えた。人が知覚する脳（公共的現象）は实在とは異なる。实在の脳は数学的に記述される科学的構造である。「痛み」を感じている時、その痛みと存在論的に同一なのは物質の脳ではなく、脳の科学的構造である。

現象世界の大半は科学的に説明できる。ならばクオリアにも科学的な構造があるはずであり、それが構造实在論が言う意味での科学的構造であるというのが私の考えである。

大森の透視因果の系列は時間的に可能的に無限に遡行でき、少なくともビッグバンまで辿れる。

要するに实在論者（唯物論者）は「物があることを原因として心がある」と考えるのに対し、大森は「心があることを原因として物がある」と考えたわけである。

私はこの大森の発想は正鵠を得ていると考える。リンゴや脳や眼など公共的現象の实在とは、視覚像という私秘的現象の「構造」だとみなせば心的因果の問題は大転換する。心がなければその構造（物）もないということになるからだ。

前述のように永久主義を前提すれば因果関係は实在せず、意識内在的な概念となる。ならば因果の向きを素朴实在論的に見ても構わないし、大森のように逆向きに見ても構わないのである。心的因果の問題は逆転するのだ。

なおカントの超越論的観念論は、因果の問題については大森の透視因果説と類似のものである。カントはアンチノミーを根拠に現象世界が实在と対応しているという真理対応説を否定した。現象世界とは、アプリオリな感性の形式である時間空間と、悟性のカテゴリーである因果関係などによって「構成される」ものである。これが対象に従って人が認識するのでなく、アプリオリな認識の形式に従って対象が現れるとする「認識のコペルニクスの転回」である。過去の時間とはそれ自体で実

在しているものでなく、現在の現象を起点にして諸現象の因果的連鎖を無限に遡れるという遡行可能性に留まることになる。

要約すると、唯物論では過去の「物」を原因として現在の「心」が存在するとみなすのに対し、観念論では現在の「心」を原因として過去の「物」が存在するとみなすのである。

私はカントや大森と異なり、構造実在論を前提しているので過去は科学的な構造として実在しているとみなす。そして永久主義を前提しているのでその構造は不変であるとみなす。永久主義が前提する四次元のブロック宇宙は不変である。その宇宙は常識的な方向で見ても構わないし、その逆から見ても構わない。私は因果の向きを逆向きに見ているだけである。

4 __ 3 反転図形としての観念論と唯物論

唯物論者は「物があることを原因として心がある」と考えるのに対し、カントや大森は「心があることを原因として物がある」と考えたのであった。このような観念論的世界観によってのみ、心的因果を無理なく説明できるのである。

物理学者にも永久主義の支持者は多いので、因果の関係を意識内在的なものとみなしても自然科学と相克するわけではない。因果はみかけのものだという前提ならば、因果を「逆順」「正順」のどちらで見ても構わないということになる。

観念論的な形而上学は途方もない主張のように思われるかもしれないが、実際は世界を見る視点を変えただけである。物理学的説明の見方を逆にしただけで物理学の説明そのものを否定するわけではない。したがって物理学と親和的で、一種の物理主義だと解釈できるだろう。

観念論的に見方を逆にした理論は唯物論的同一説（トークン同一説）と一致させることが可能である。両者は以下のようなアヒル-ウサギのような反転図形のように同じ形をしていると言ってもよい。同じ対象を見ているのに一方の見方をしているときはもう一方の見方が出来ないというだけである。



私の理論は観念論と唯物論の同一説と言えるだろう。これはアヒル-ウサギの図において、アヒルとウサギが同一であるのと同じである。一方を見ている時はもう一方が見えないだけである。「心があるから物がある」とする観念論と「物があるから心がある」とする唯物論は、同一の四次元時空の見方が異なるだけである。

私の理論は構造実在論と永久主義を組み合わせたものであるが、それらは物理学との整合性から支持する論者も多いので、この理論は唯物論者も受容可能だろう。

私は心脳問題の実質とは「心的なもの」と「物的なもの」の関係の問題ではなく、「現象と実在」の関係の問題と定義し直した。そして素朴実在論を否定して物質的対象の科学的構造のみが実在的であると考えた。そして時間の形而上学では永久主義が妥当と考えた。これらの前提から「現象と実在」の関係を考え直すならば、**実在とは現象の構造である**という結論になる。

私の心脳問題解消方法は以下の二つの理論からなる。

方法 1 : 構造実在論を前提し、私秘的現象（クオリア）にも公共的現象（物質）にも実在的な科学的構造があるとする。クオリアと対応するのは物質の脳ではなく、脳の科学的構造である。

方法 2 : 永久主義を前提して因果関係を見かけのものとし、正順と逆順のどちらから見ることも可能として心的因果の問題を解消する。

私の理論の核心は、観念論と唯物論は唯一の存在である四次元時空の見方が真逆なだけで、同じものだということである。

5 派生問題

私は心脳問題を解消できたと思っているが、心の哲学にはまだ重大な謎が残っている。

永井均によって提起された独在性の問題もその一つである。これは大きな問題であり、ここでは詳述することが出来ない。

もう一つ心の哲学には重大な問題がある。それは意識やクオリアといったものの正体である。

本論第一章で私は現象（意識全般）と実在を分け、現象を私秘的現象と公共的現象に分けた。しかしそれは、そのようにカテゴライズ出来るというだけであって、現象そのものについて何も語っていない。

たとえば「一個のクオリア」とは何だろう。赤、黄、青と三つの色を順々に見た場合それは三つのクオリアとも考えられるし、三つの性質を持つ一個のクオリアとも考えられる。後者が可能ならば私の人生全体も一個のクオリアであることも可能だろうが、そう考えるのは難しい。——このような問題もあるのだ。

そもそも人はクオリアを正確に認識できているのかという疑問もある。たとえば「赤のクオリア」と言う言葉は何を示唆しているのだろう。

「赤のクオリアとは何か」という素朴な問いには答えがないかもしれない。赤は多くの述語で説明できるが、それら述語はいずれも赤そのものについて語っていない。赤を中心に多くの述語を集め添えても、赤そのものはブラックホールのように論理と意味の世界に開いた空虚な穴のように見える。クオリアは論理や意味の枠組みの外部にある。

人の認識能力の限界は認識そのものを認識できないことだ。痛みがあった場合、人はその痛み外部の視点から「これは確かに痛みだ」と確認することができない。このような懐疑を一般人は不毛と思うが、哲学的懐疑とはそもそも人の認識能力や認識の確実性を吟味するためにある。懐疑は哲学の基礎なのだ。

たとえば痛みがある時、実際には痛みのクオリアではなく甘さのクオリアだという可能性が、ひょっとしたらあるのではないか？

錯覚論法というのがある。蛇を恐れている人が山道を歩いているとき蛇を見たが、よく見ると朽ちた縄だった。このような錯覚はよくあるが、この場合は縄の視覚像を蛇だと誤判断したということになる。

クオリアと判断はこのように分離可能かもしれない。

この錯覚論法を敷衍すると、朽ちた縄を一見して蛇だと誤判断し、近寄ってよく見ても依然として蛇だと誤判断し続けるということが、人間にはあるかもしれない。

あるいは、人間は一生何かを錯覚し続けるということもあるかもしれない。

上のような懐疑で私が主張したいことは、知覚や意識の正体というものは検証不可能なため、よくわからないということだ。人は自分の意識そのものをずっと誤解している可能性があるということだ。

心の哲学では現象的意識（クオリア）とアクセス意識を分けて考える場合がある。

たとえば繁華街を歩いていると様々なものが見え、同時に様々な音が聞こえ、同時に様々な匂いがある。しかし街を歩く人はそれら全ての現象を逐一意識しているわけではない。五感で得る現象の大半は前意識や無意識の領域で処理されていると考えられる。

しかし街の雑多な光景の中に自分が憧れている映画俳優のポスターがあったなら、人はそのポスターを意識するだろう。この場合、映画俳優のポスターという視覚現象にアクセスしたことになる。

このようにクオリアそのものと、クオリアについての判断は分けることが可能だと私は考える。意識やクオリアそれ自体は正体不明であり、確実性が高いのは「判断がある」ということのみだろう。

妥当な判断とは、疑い得ない前提から正しい手続きによって導出された判断のことである。ところが「痛み」のクオリアの場合、それは直ちに痛いという判断でもある。クオリアによる判断はプロセスが存在しないため、人はその判断の妥当性を云々することが出来ない。

意識の正体は不明である。意識の正体は不明ならば、それは「私」の正体が不明ということになる。

デカルトやバークリーや大森荘蔵は現実と夢や幻の相違を深く考究した。それは相違を知りたいという陳腐な理由ではなく、相違の考究によって人の意識経験の正体とは何なのかを解明しようとしたのだ。そして彼らはそれぞれ自分の哲学の方向性で答えを見出している。

私が意識の正体を解明できるかはわからない。それは人間理性を超えた問題であるように思える。

意識の正体。それが心の哲学の最後の謎だろう。

Copyright

エレア・メビウス

2022年10月21日

[心の哲学まとめ TOP ページに戻る](#)